

MUSIC MAGAZINE

MAY 5 1996

特集 **ブラジル音楽の新しい世界**

またまた変身、ロス・ロボスの新作

ベン・フォールズ・ファイヴ
無敵のパワフル・ピアノ・ロック



ソテジ・ワ・アイドル / ジョン・ウー / スーパー・ジャンキー・モンキー / アトランタ

ブラジル音楽の新しい世界



フェルナンダ・アブレウ「ダ・ラータ」
(EMI TOCP8829)

・メンバーではないがリミーニャはベースを弾いていた)の歌姫だったリタ・リーのナンバー「New Look / New Look」、そしてアントニオ・カルロス・ジョビンの「ジェット機のサンバ」を95年の解釈で歌っていたりする。リミーニャはその他にもバーリアアの若き女王タニエラ・メルクリヤ、ブラジリアン・レゲエ・バンド、シターヂ・ネグラなどを手掛けたりと、その仕事ぶりは多岐を極めている。が、広くポップス・ファンにまでリミーニャの名が目されるようになったのは、ソウル・II・ソウルのウィル・モワットとプロデュースを分け合ったフェルナンダ・アブレウの、昨夏からロング・ヒットしているサード・アルバム『ダ・ラータ』からである(フェルナンダの前作もフアビオ・フォンセカと共にリミーニャがプロデュースしていたのだが)。

この女性もブリッツというバンドでアイドル的存在としてスタートしながら、今はクル



ライブとスタジオ録音の新曲を収録したパラマラス「Vamo Bate Lata」(EMI 834158-2)

に自己の路線を切り開いているという点で、アイドルとしてスタートしたマリーナ・リマと共通項を持つ人。新作ではクラブ・サンバともいったらいいのか、とにかくこのアルバムでしか聴けない新しいリズムがこれでもかこれでもかと披露され、その間をフェルナンダが風切って歩くような勇ましいアルバムになっている。

この問題作に関わる連中はというと――。

①スカをベースに、アフロやジャズなど様々なリズムを消化して、本国のみならずヨーロッパでも大人気のブラジリアン新世代バンドの代表とも言いたいオス・パラマラス・ド・セツソ(普通、パラマラスだけで通じる)のリーダー、エルベルチ・ヴィアナ。フェルナンダのファーストは彼がフアビオ・フォンセカと共にプロデュースしていて、パラマラスの初期のアルバムはリミーニャの手による。パラマラスはアルゼンチンのロス・ファビュロソス・キャディラックスと並んで、近年日本でもファンが増えてきた要注目集団。

②ソウル・II・ソウルのウィル・モワット
③マルコス・スザーノ
④マルコス・スザーノとコンビを組んで活動している詩人兼ギタリストのレニーニ
⑤セルソ・フォンセカ
⑥最近ではガル・コスタとカエターノ・ヴェロゾ、この両スターのプロデュースをしているチェリストのジャキス・モレンバウム
ラジル映画としては珍しくアカデミー外国語映画賞にノミネートされた「O Quatino」の音楽は、ジャキスがジョルジュ・ドルリューバリのスコアをつけている。これにはカエターノも参加。

などなど、よくこれだけ集められたし、これだけ集まっていたら、あの音が出てきても驚くに当たらないすごいメンバーだ。

共同作業で刺激を与え合う重要人物ら

そして、ウィル・モワットはブラジル中毒になってしまったのか、BMGブラジル傘下のナターシャ・レーベル(セルソ・フォンセカの初ソロ・アルバムはここでリリースされた)からの新人女性シンガー、ダウジーのデビュー・アルバムからのシングル「Vô Wava」のリミックスを手掛けている。この曲がまたカルリーニョスとセルソ・フォンセカによって作られたもので、まあ強力で当然。ダウジーはやっと今月、日本盤も発売になる。容姿

ブラジル音楽の新しい世界

いう人たちがなんでしよう。

「すごくミックスされてる。年齢で言ったら15歳から40歳ぐらいかしら。貧しい人、お金持ちもいれば、黒人、白人もいる。シヨウをやることと観客を見渡すと、すべての人がいることがわかる。すごく素敵ね」

—それは珍しいこと？

「ええ。ブラジルでは収入によって階層がわかれていて、社会は決して平等ではないから。ブラジルのミュージシャンの多くはお金持ちの家の出で、だから楽器を買って、大学に行って、音楽をやることができたんだけど、現在はそれが少しずつ変わってきている。今では黒人のミュージシャンもたくさんいるし、そういう人たちはサンバだけじゃなくて、ファンクやいろんなことをしている。いいことだと思うわ」

—ところで、リミーニャってどんな人？

「リミーニャは85年からつき合いのある古い友人。彼はブラジル一のプロデューサーよ。彼はすごく革新的でクリエイティブなロック・バンド、ムタンチスのベース・ブレイヤーとして70年代に有名になった人なのよ。今はシコ・サイエンスやダニエラ・メルクリなどを手がけていて



Fernanda Abreu's radical dance (disco club) "Sla Radical Dance Disco Club" (EMI 364 794631 2) 90年のファースト・ソロ・アルバム

：そう、リミーニャはジルベルト・ジルのような大物をプロデューサーするだけでなく、多くの革新的でクリエイティブなプロジェクトも手がけている。彼は慣習にこだわらない。いつも新しいサウンドを探していて、彼が見つけてきたものはみんなビッグになるのよ」

—なるほど。「ダ・ラータ」にはマンゲイラのパーカッション隊も参加してますね。これは？

「まず、マンゲイラっていうのはすごく大きくて、一番古くからあるファベラ——これは山のほうのラムという意味なんだけど——の名前なの。私にはそこに住んでいる友達がたくさんいるから、彼らに参加してもらおうとすごく自然に思った。なぜならこのアルバムは、サンバやファンク、ボサノヴァ、そしてリオやブラジルでクリエイティブされているすべてのグループをミキシングしよ



「Sla」～ Be Sample (EMI 368 780404 2) 92年のセカンド

うとしたものだから」

—ジャケッットで、メタルやジャンクにこだわったのはなぜ？

「プリキはブラジルのいたるところで使われていて、それにファベラの多くの歌にもうたわれている。ファベラではフライパンや缶を使って演奏したの。たとえジャンクでも、光を灯せば豪華なものに変えることができる。だから私はフロント・カヴァーでプリキの製品を身にもった。私にはプリキの音こそブラジルのサウンドっていう感じがする」

—インナー・スリーヴの最後ではブラネット・ヘンブ（ブラジルのラップ&ファンク・バンド。シコ・サイエンスと同じレイオス・レーベルからアルバムをリリースしている）のフレーズが引用されていますね。あなたは、こうしたラップやロックの新しいグループとも繋がりを持っているんですか。

「ブラネット・ヘンブはリオのバンドよ。彼らはマリファナについて語っているからブラネット・ヘンブっていう名前なの。こんな話があったね、7年ぐらい前にリオ・デ・ジャネイロで、密輸船が警察に見つかって、マリファナが入ったプリキ缶（ダ・ラータ）をたくさん海に投げ捨てた。それでリオとサンパウロでは、最高のマリファナのことを「ダ・ラータだ！」って言うようになったの」

—あなたもカヴァーしているベンジヨールとカエターノ・ヴェローソの二人についてコメントしてもらえますか？

「そうね、私たちの音楽の歴史の上で、彼らはすごく才能に溢れた偉大な人たち。彼らは私たちの文化であり、音楽そのもの。ベンジヨールはギターのグループをクリエイティブした人でサンバ・ファンクの父なのよ。だから私が彼の曲をカヴァーするのは当然の成り行きだった。カエターノ・ヴェローソは：何ていえないのだから。すごくすくく偉大で才能に溢れた人。数多くの素晴らしい曲を作っている。私は子供の時から彼のレコードは全部持っていて、彼の曲なら全部知ってるって言えるわね」

インタビュー

フェルナンダ・アブレウ

たとえジャンクでも、

光を灯せば豪華なものに変わる

「ああ、このアルバムもフェルナンダだったのか！ これなら以前にも見かけたことあったわ」と、昨年10月号「輸入盤紹介」で『ダ・ラータ』を取り上げた直後に、輸入レコード店でハタと気づいた。

だつてですよ、こんなジャケットだったんですから、彼女の以前のアルバムって。特にソロ2作めの『Ira~Be Sample』なんて、なかなか手が出せないですよ、このジャケット・デザインじゃあ。

『ダ・ラータ』はジャケットを含め、一発で気に入った。ただし、特にウィル・モワット作曲などは端正すぎちゃって、もう少し人間くさい感じがあってもいいんじゃないの、とも思えた。

なのに、だ。90年の1枚め『S&A Radical Dance Disco Club』なんてもう、綻びだらけ。無防備な名

質問作成・構成 高橋道彦

電話インタビュー 峰岸喜美子

前どおりのディスコ・アルバム。なぜ？ 謎が謎をよび、逆にがぜんフェルナンダ・アブレウという人への興味が湧いてきた。

素顔のフェルナンダは、笑顔を見せないジャケット写真と違い、とても気さくな人だ。「たいへん失礼ですが……」と切り出した生年月日の質問にも「1961年9月8日、リオの生まれよ」と気軽に教えてくれた。

——ソロ1作めではハカンフー・フアイティングVやハガット・トウ・

ビー・リアルVをカヴァアするなどディスコ・クラシックを数多く使ってますが、なぜタイトルに「ラディカル」とついているんでしょうか。

「そうね。あれはロックでもポップスでもMTVでもなく、ダンス・ミュージックのアルバムだった。ブラジルでダンス・ミュージックがポピュラーになったのは70年代で、それはディスコ・ミュージックによつてだった。当時のブラジルは軍事政権に支配されていて（注・ブラジルの民政移管は85年のこと）、まったくクズみだった。夜、クラブに踊りに行くことは、ブルシット！と考えられていた。私は89年からアルバム作りにとりかかったんだけど、ディスコ・クラシックをもう一度取り上げなければならぬと思ったの。それは私にとって古傷を爪でひつかくようなことだった。わかるかしら？ 70年代の初期、ここリオではファンクがよくかかっていたけど、ブラジル全土でダンス・ミュージックがポピュラーになったのは76年ころ。でもそれはディスコで、ファンクとは違っていた。ディスコ・ミュージックには、多くのシットとグッドとバッドが含まれている——」



新作のタイトルになった『ダ・ラータ』とはプリキ伍のこと